㈱　ハピラル・テストソリューションズ
2023 年 2 月 28 日

令和５年度（2023 年実施）大学入学共通テスト「地理Ｂ」について

１．はじめに

令和３年１月より大学入試センター試験（以下，センター試験）に代わって導入された大学入学共通テスト（以下，共通テスト）も，この１月で３年目を迎え，共通テストの出題傾向が固まってきたように思われる。共通テストの導入にあたっては「大学への入学希望者を対象」に「高等学校学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえ」て「大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力，判断力，表現力等を問う問題作成」がその役割[参考1]として掲げられている。問題作成方針や実施要綱[参考2]でも繰り返し明言されている，これらを念頭において実施された問題を見てみると，前述の役割を意識した出題であると言える。

以下，令和５年度実施の共通テストの詳細を見ていくにあたり，まず，平均点と受験者数の過年度推移を表１に示した。

表１　共通テストの平均点・受験者数の推移

試験名	平均点	受験者数（人）
令和３年度　共通テスト　第１日程	60.06	138,615
令和４年度　共通テスト　本試験	58.99	141,375
令和５年度　共通テスト　本試験	60.46	139,012

（各データは大学入試センター「大学入学共通テスト実施結果の概要」による）

平均点が 60 点を下回った令和４年度と比べ，令和５年度は 60 点台へ回復した。他の社会科科目と比べても年度間で難易度に大きな差が生じることもなく，適正な難易度を保っていると言える。

次に，令和３～５年度に実施された共通テストの本試験（第１日程を含む）の大問数など，問題構成は表２の通りである。

表２　共通テストの問題構成の推移

試験名	大問数	設問数	解答番号	ページ数	図表点数	最大選択肢数
令和３年度　共通テスト	5	30	32	34	37	8
令和４年度　共通テスト	5	30	31	34	39	8
令和５年度　共通テスト	5	30	31	36	38	6

（いずれの年度も本試験および第１日程問題冊子より算出）

参考１　大学入試センターＨＰ（https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_gaiyou/yakuwari.html）
参考２　大学入試センターＨＰ（https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r5/）

３年分の問題構成から，大問数および設問数に大きな変動は見られない。共通テストの特徴として，センター試験よりもグラフや表などの図版点数が増加したことが挙げられるが，この傾向も維持されている。令和５年度では，平成 31 年度以来 34 ページで維持されていたページ数が，２ページ増加し，36 ページとなった。これは資料や図表の増加・多様化によるもので，設問１問につき使用する図表点数も増加している現状においては妥当なページ数と思われる。また，組合せ問題（グラフと都市名の組合せなどの形式を指す）の選択肢数が増加傾向にあった共通テストのなかで，令和５年度は最大選択肢数が６であった。これはセンター試験と同程度の選択肢数であり，過去２回よりもコンパクトな構成になっていた。

２．ポイント解説

センター試験と共通テストを比べた際に見られた，大問構成の変化や読み取り問題の増加といった特徴については，令和５年度においても継続していた。そのうち，令和５年度共通テスト本試験において特筆すべき項目は以下の通りである。

◎新学習指導要領を見据えた地誌分野

センター試験から共通テストへの移行にあたり，大問構成が変更された。その影響を最も受けたのが地誌分野の出題であったが，令和５年度の地誌分野の出題（第４問）ではこれまでの懸念に対応するための工夫と，新たな学習指導要領[参考 3]を見据えた取り組みが見られた。

令和５年度の地誌分野では，「インドと中国」というテーマで出題された。ここでは従来のセンター試験や過去の共通テストで見られた中問Ａではインドの地誌，中問Ｂでは中国の地誌という分割形式ではなく，あくまでも「インドと中国」という２つの国を，隣り合う１つの地域として注目した地誌分野の大問として出題された。個別の国の地誌というよりは比較地誌の大問に近いが，令和５年度に特徴的なのは，その大問の説明文において「インドと中国は地理的に連続しており，ともに人口が多く経済発展を遂げている」といった前置きを示していることである。従来の地誌の大問では任意の２か国あるいは地域が与えられて大問が展開されており，なぜその２か国に注目したのか，どうして地誌を比較・検討する必要があるのかといった説明がされることは少なかった。それが令和５年度においては前述のような説明がなされ，地誌分野における導入となる記述が与えられている。解答には直接影響がない部分ではあるが，こうした変化は新学習指導要領の「国際理解」や問題作成方針の「「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定」に通じるものであると考えられ，出題者の意図を感じる大問となっている。

◎初見資料への対応とその応用

参考 3　文部科学省ＨＰ（https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf）

共通テストで測るべき能力とされた「思考力，判断力，表現力」は，共通テストでは資料の読み取り問題として現れた。地理では従来の教科書で見たことのある資料に基づいた読み取り問題から離れ，受験者が初めて見る資料を用いて思考，判断する出題がされてきた。たとえば，気象データの判別問題ではセンター試験で定番だった雨温図，ハイサーグラフや月別の気温をまとめた表による出題が見られなくなり，代わりに受験者が初めて見るような気象データの模式図（令和５年度第１問問３の気温分布の等値線など）で各地の気候を考察させる出題がされた。従来であれば気候の特徴と地点の知識で解答可能であったが，共通テストではそれらに加えて資料から読み取った情報からも総合的に思考する必要がある。

さらに，令和５年度ではそれらに加え，設問中に示された統計データの指標も初見のものが出題された（第３問問５）。この設問では「従属人口指数」という教科書にも記載のない，多くの受験生にとっては初見の指標によって各国を判断させている。しかし，初めて見る指標だから判断が難しい，というわけではなく，この初見の指標については，それがどういった意味を持つ数値なのか，その算出方法が同設問中の注で示されている。加えて，この指標が用いられているのは地理の教科範囲のなかで定番といえる，各国の人口推移に関する設問である。さらに，問われている各国も日本や中国，エチオピアといった特徴がつかみやすく判断が容易な選択肢が並んでいる。そのため，最低限の各国の人口動態について把握していれば解答は可能であり，初見資料という未知の状況を既知の情報で補い，思考，対応することで難易度が調整された設問と言える。受験生としては，この解答に至るまでの過程に，教科書で学んだ人口動態の特徴をもつ国々の知識に基づいて思考し，設問中に示された未知の指標を用いた場合，どういった結果を表すか，ということを推論し，判断することが求められている。こうした思考の過程によって，新学習指導要領に掲げられた「未知の状況に対応できる」「社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう」な学力を測定するというのであれば，その役割に一定の効果が見込まれるだろう。

◎資料の読み取りにともなう組合せ形式の増加

共通テストの特徴として，選択肢に組合せ形式が増加したことが挙げられる。表３のように，最後のセンター試験となった令和２年度の本試験と過去３回の共通テストを比較するとその傾向が見てとれる。

表３　令和２年度センター試験から令和５年度共通テストの選択肢形式の推移

	文章選択	単一選択	組合せ	その他	合計
令和２年度　センター試験	8	16	11	0	35
令和３年度　共通テスト	5	6	20	1	32
令和４年度　共通テスト	6	5	19	1	31
令和５年度　共通テスト	5	7	19	0	31

（いずれの年度も本試験および第１日程問題冊子より算出）

内訳としては図やグラフの増加に伴い，それらの読み取り事項と単語や文章とを組合せた形式が急増した。グラフ中に該当する図版や模式図を選択させる形式は引き続き見られるが，かつてのセンター試験で見られたような用語の知識を問う単語一語の単一選択形式はほとんど見られなくなった。これらに比べると文章選択の数値はそこまで大きな変動は見られないが，実際の設問では文章中の下線部として組み込まれたり，会話文の一部として示されたりと変化が見られ，従来の事項説明調の文章は減少している。総評として，共通テストではセンター試験と比べ出題形式が複雑化し，組合せ形式の増加のために１問あたりの判断要素も増加したと言える。

令和５年度の問題で例を挙げると，２つの要素が表現された表について読み取り，その組合せを解答する形式（大問２問５や大問４問５）が引き続き出題された。また，これまで短い説明文で表現されていた選択肢が，会話文形式（第３問問３問４，第５問問３）や長文中の下線部形式に集約され，さらに図表の選択肢も組合せる，という形式が見られた。このような変化はすべて新学習指導要領の「思考力，判断力，表現力」や問題作成方針の「学習の過程を意識した問題の場面設定を重視」といった事項を意識した結果と考えられる。加えて，令和５年度では，過年度に散見された解答に不要な資料や，資料の読み取りのみで解答が定まる設問も削減され，資料から読み取れる事項と地理的知識のバランスが改善されたと考えられる。

３．まとめ

共通テストの問題作成方針にて，地理は「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視」し，「地理的な諸課題の解決に向けて構想したりする力を求める」ために，「思考の過程に重きを置きながら，地域を様々なスケールから捉える問題や，地理的な諸事象に対して知識を基に推論したり，資料を基に検証したりする問題，系統地理と地誌の両分野を関連付けた問題」を検討するとされた。これを受けて，地理の試験としては年次による調整を重ねつつも，共通テストとしての方針・方向性は固まってきていると言える。こうした傾向は今後も継続していくと予想できるが，あわせて，課題についても明確になってきたと考えられる。

共通テストの課題としては，大学入試センター公表の令和４年度の自己評価[参考4]にて，「解答に相当の時間を要する点」，「文字数が多い点」，「学習量に比して高得点が取りにくい傾向」（「大学入学共通テスト問題評価」より）が挙げられている。前者２つは試験自体の分量の問題であり，令和５年度において選択肢数が最大６つに抑えられていた点はこうした課題に対応した結果と言えるだろう。また，分量や時間については，ある程度受験生の「慣れ」にも拠るところがあり，今後受験生の適応によって解消されると予想できる。ただ，「学習量に比して高得点が取りにくい傾向」については，令和５年度をみても学習

[参考4] 大学入試センターＨＰ（https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/hyouka/）

量を活かせるような知識問題と資料読解の設問の両立が難しいことがうかがえる。過年度よりは改善されつつあると思われるが，この点は未だ解決しているとはいえず，作成者による自己評価では今後も引き続き課題として挙げられると予想する。

従来のセンター試験では，高校範囲での「学習量」による知識を基にして解答する設問が多くあった。それゆえその難易によって受験者間の判別もつきやすく，受験者の「学習量」と得点が比例しやすい構成であった。しかし，新学習指導要領や問題作成方針に見られるような問題解決能力，資料問題を重視し，資料の読み取りができるかという新たな指標を取り入れた共通テストでは，解答するにあたって，地理の教科知識以上にこのような指標の比重が大きくなっている。そのため，「学習量」によって受験者間の能力を判別することが難しくなるのは必然といえる。これは一連の変革と表裏一体の課題と言え，今後，経年の対策によって受験者全体が資料の読み取り方を身に付け，そういった出題に慣れた場合，学習量を評価するには，難易度の差をつけるにはどうするのか，という点にどう対応するかは引き続き注視していく必要がある。

さらに，地理を取り巻く環境の変化としては令和４年度の学習指導要領改訂によって「地理総合」が必修化されたことが挙げられる。これに伴い，令和７年度の共通テストからは「地理総合，地理探求」が実施される。地理が必修とされるのはおよそ 50 年ぶりということだが，こうした事態を受け，受験者は地理を選ぶ機会が増加するのではないか。事実，令和５年度本試験の受験者数では，例年，社会科科目で最多の受験者数であった日本史Ｂをわずかに上回り，地理Ｂが最多の受験者数を記録している。他の社会科科目でも図表の読み取り，資料の読解を求められているため，受験者のなかでは，比較的読み取りがしやすく，受験者の実生活に紐づけて考えやすい地理で受験する，といった心理も生まれるかもしれない。受験者がどう判断し，どう対応していくかについても今後の検討材料となるだろう。

以上